

宮崎市と姉妹都市の韓国・報恩郡の中学生各10人が相互に行き来する事業で、派遣された訪問団の報告会が12日、同市の宮崎公立大であった。保護者や在籍する学校の校長ら約20人を前に、生徒たちは「国や言葉が違っても心は通じることを感じた」となどと語った。

国、言葉違っても心は通じる

—宮崎市—

訪韓中学生が報告会



韓国・報恩郡の中学生らとの交流について報告する宮崎市の訪問団員

報恩郡との交流は旧高岡町が姉妹都市盟約を結ぶ前年の1992年に始まり、8人が派遣されている。本年度は、市内の中学生61人が応募。市は書類審査とグループワークで、9校の2、3年生の男子3人、女子7人を選んだ。一行は7月29日～8月2日に訪韓。ソウル市の祥明大で韓日文化コンテンツ専攻の学生と文化の違いについて話し合った。報恩郡では家庭を訪ねるホームビジットやピクニックボールなどのスポーツを通し、現地の中学生と友達になった。

大塚中3年の横山希望さん(15)は「完璧に韓国語が話せなくても、笑顔と伝えたいという気持ちがあれば、知っている英語やジェスチャーで、ちゃんと伝わると実感した」と話した。

11月には宮崎市に報恩郡の中学生を受け入れ、交流する予定。(堀伸一郎)